《書評》

リンダ・ノクリン著『リアリズム』(1990)の書評を終えて
―まとめ―

円尾　健

2006年に、頭書の書評をこの『仏文研究』に執筆することになって以来、執筆は三回に及び――第37号(2006年)、第38号(2007年)、第40号(2009年)――結果的に100枚を超す一大(!)書評に発展して、われながら“想定外”の結果となったようなしだいである。その間、編集の諸氏には貴重なスペースを提供してもらっただけでなくいろいろ世話になり、あらためて、この場でお礼を申し上げたいと思う。

さて、最初の書評の冒頭でも述べたように、評者は十九世紀フランスの、とくにリアリズム文学からフランス文学の勉強を始めたものの、外国文学研究についてべつに確信や定見を持ち合わせていたわけでもなく、そのうちにいつしか当時の――恐らく今でも――、日本での一般的なリアリズム観（リアリズムを「写実主義」という日本語でおき換え、十九世紀ヨーロッパ、とくにフランスで有力な思潮であったにしろ、要するにそのわく内に押し込んでしまう）に安住するうちに、このまま時代おくれのリアリズムにかかわっていては先が見えているのではないかという危機感（!）に捉われ、もっとナウいテーマでも、と考えていたところ、一、二のきっかけから、そもそもリアリズムとは一体何かという問題に直面し、同時に日本でのリアリズムに対する見方にも疑問を持つようになったのである。その後、リンダ・ノクリンの『リアリズム』に出合い、それが本誌での三回に及ぶ書評と相成った、というわけだ。

一方、これらの作業を通して問題はリアリズムにとどまらず、近代日本の社会と文化にも及ぶことを痛感し、その都度書評でも言及して来たが、今、その書評を終えるに当って要点を整理してまとめる必要と同時に義務を感じて、あらためて筆をとることにした。

1

以上の作業の過程で、日本での、外国文学そして外国文化一般のあり方や、研究の進め方について出くわしたさまざまな意見や感想のうち、とくに有益で、示唆に富むと思われるものを――重複するのは承知の上で――若干、以下にあげることにしよう。

わが国のフランス文学界の大先達の一人、渡辺一夫に『フランス・ユマニスムの成立』(1957年、岩波書店）という著作があり、その中で著者は、その成立事情を語っている。もともと東大で行った講義の草稿から本書が生れることになったのだが、「本来、私は単なるフランス・十六

世紀語学、文学の鑑賞者的入門者にすぎず、思想史・文化史・歴史的な究明を十分に行う能力を持た」ず、それらの講義も、ノートを学生の便宜のために提供したにすぎない。堂々たる題を掲げながら、思想史・文化史・歴史・古典学の専門家の目からは、内容が貧寒で、欠陥だらけに違いない。「一介の十六世紀フランス語学・文学入門者」たる自分が読んだ研究書は、「どうしても語学・文学方面に限られやすく、且つ古典やキリスト教や歴史に暗く」て、必要な名著を見逃がしているに違いないが、いずれ識者の叱正によって、正しい見地に立ちたい。

以上が、執筆に当っての、渡辺の自己の立場の表明である。表現こそへり下っているものの、アプローチの姿勢としてはすぐれて自覚的であり、今なお研究のあり方の根幹に触れる問題提起といってよいだろう。

ついで、作家で批評家、かつ大読書家であった故中村眞一郎の発言を聞くことにしよう（季刊『文学』第七巻第4号。岩波書店、1996年秋）。この「21世紀の日本の教養にむけて」と題するインターヴューで、中村は日本の近世知識人と近代知識人との違いから説き起こして近代日本文化について語っている。近代に入って、必要に迫られたにしろ、日本は西欧から法律にしろ、自然科学にしろ目先のでき上ったものばかりもらって来て学問を始めた。文学にしても同様で、そこからその根無し草的性格が生まれて来るが、一方ヨーロッパでは、ゲーテのギリシャ的教養をはじめとして、すぐれた作家たちはローマ以来のラテン語の世界から養分を得て創作している。ジョイスにしても、その実験がまるごとギリシャの古典に拠っているのは周知の事実である。「シュールレアリズムでも、いきなりシュールレアリズムということはあり得ない。」思想家にしても、日本でサルトルを輸入したころからやっているように、その自己形成――プラトンなどを読んで、その上で近代の問題にぶつかって自分の哲学を形成した――を抜きにして、それを追体験せずにいきなりサルトルを論じても、基礎が不安定だと身につかないだろう。「ある思想家が、いきなりその思想家になるなどということはあり得ないことだから」。

これも、すでにわが書評の中で触れたことだが、『フランス・ロマン主義と現代』（1991）の編者は、日本のロマン主義の研究の現状について、先進諸国のそれにくらべてかなりの立ち遅れを指摘し、個々の専門研究は比較的さかんだが、フランス・ロマン主義を統一的にとらえようとする試みは、ごく少数の例外以外はほとんどなされてこなかったと断じ、このような基礎作業をあやふやにしたままではまともな成果は望むべくもないとする。以上の指摘は、なにもロマン主義だけにあてはまるというのでは毛頭なく、他のエコールについても、当面のリアリズムについても事情は変らないのである。

ついでながら、西洋古典学の田中美知太郎は、その解説「アリストテレスの思想と生涯」（世界の名著シリーズ8『アリストテレス』、中央公論社、昭和53年に所収）で日本のアリストテレス理解に言及し、それがまだ「発展途上」にあることを指摘し、この哲学者を長い歴史の連鎖の中に位置づけて、その理解のためには、世界の思想史の大きな枠組みを作ったギリシャ哲学全体の流れの中で理解する必要を説いているが、その中で、わが国のこれまでの哲学や思想の理解の仕方について、「ヘーゲルとかカントとかいうものを他との関連から引きはなして、いわばダルマが面壁何年かするような流儀で、書物とにらめっこしていて、そこから何かを悟ろうとするよ

うなものが多かった」と述べている。このように見て来ると、問題は何もフランス語学・文学の学習や、研究だけに限ったことではないことが明らかだろう。

たまたま手にした呉茂一・中村光夫『ギリシヤ・ラテンの文学』(『文学案内』Ⅰ、新潮社、1962)の「あとがき」の中で、呉は日本や中国など極東を除いた、欧米からインドに至る国々の文学、あるいは文化は次々と深い交渉を互いに持っていることを指摘し、われわれは現在、西洋、つまり欧米の現代乃至近代文学に大きな関心を持ち、いろんな面でその文化に深い影響を受けているが、それを享受なり理解するのに、「ただ目先のものを追うだけでは、実質的にはほとんど何ものをも獲ることはできないのだ」と警告を発している。「少しでもそれをよく解ろうと志すなら、同時的 synchronic と同時に、diachronic つまり歴史的な理解がなければならない」。それが欠けているために、「わが国では、相当の学者さえずいぶん変なことを言いかねない」。(ついでながら、相当の学者でさえそうだとすれば、相当の学者でない場合、どんなことになるのだろう?)

以上、日本での研究のあり方、進め方を、諸家の診断を通して検討して来たが、その現状と傾向がかなりの程度に明らかになったと考える。要するに、いえることは、目前の個別研究には比較的熱心で、さかんだが、全体を総合的に捉えようとする関心も、試みもとぼしいということであろう。

さて、以上のように見てきて、本来のテーマであるリアリズムの分野ではどういう状況にあるのか。これは、すでに書評を始めるにあたって最初に検討したとおりであり、その上で、直接には音楽批評の吉田秀和の指摘にヒントを得て作業を始めたことも述べたが、ここでもう一度、その指摘を確認しておくことにしよう。『音楽展望』(「朝日新聞」学芸欄、2000.6.30、夕刊7面)で漱石の英国日記を取り上げて論じ、その中で次のようにいう。

> あまり飛躍してもいけないが、日本人は西洋風リアリズムが苦手なのではないか。リアリズムは日本にももちろんある。だが違うものだ。日本人は見たくないものは見ない癖がある。[…] 西洋風リアリズムが根づかなかったこと、漱石以来百年大して変らない。(傍点筆者)

リアリズムは、日本にも当然ある。だが、それは違うものだ、と吉田はいう。それなら、それはどう違うのか? かれは、日本人は見たくないものは見ない癖があるというだけで、それ以上は言及していない。この問題は、実は書評の「続」で多少触れているが、さらに展開するに価すると思われる。一方、今や国際的に活躍する演出家・蜷川幸雄はイギリスでの演出の経験から、彼我のリアリズムの相違について語っていて(「毎日新聞」夕刊、1992.4.6)、それはわが最初の書評で紹介したが、その中でかれは「日本は近代化の一つとしてリアリズム演劇をとり入れようとしたわけですが、その様式だけを輸入したにすぎない、そう思いましたよ」と述べており、また同じ演劇畑の、劇団『四季』の主宰者・浅利慶太はあるインターヴュー(「文藝春秋」1996・4月号)で、日本人とリアリズムの関係に言及し、「明治の近代化以来、日本人は結局、リアリズムを本質的にとらえられなかった。リアリズムという名の形式主義ばかりやっていたんですね。

なぜ日本では本物のリアリズムが育たなかったのか […]」と語っている。いずれも、もっと論議を深める必要があると思われるが、それは後にまわすことにして、次に移ることにしよう。

2

太平洋戦争以後の日本で、フランス・リアリズムともっとも深くかかわった人物の一人に、亡友の尾崎和郎がいる。リアリズムを語る上でかれを逸することはできないので、かれを通して問題を見て行くことにする。

かれは1931年生まれで、評者より二才年上、この京大仏文科を経て大学院修士課程を修了、東京に移住して高校教師を経て、成城大学に職を得、定年を待たずして六十四才で病没するという生涯を送った。ちょうど同じ年に修士課程に入学、かれは病気で二年おくれ、当方は京大は初めてというところから親しくなり、その後かれが死去するまで交友関係は続いた。そのようなわけで、個人的にも、小生の京大での年月はかれ抜きでは考えられないのである。

ところで、かれは学部の卒業論文にモーパッサンを取り上げ、修士論文にはゾラを選んでいた。こちらは修士論文にもモーパッサンをえらび、ともにリアリズム志向で、そんなこともあって話も合い、ひまがあれば議論してすごしたことをおぼえている。ついでながら、時代は変り、昨今では「文学青年」、「文学少女」といったことばはあまり聞かれなくなり、そのうちに死語と化すのではなかろうかと思われるが、あの当時にはまだまだ通用する、生きたことばであった。そして尾崎は、まさしくその文学青年の一人で、雑誌の懸賞小説に応募したりしていたのを知っている。すでに述べたように、マスター論文にゾラを取り上げていたが、大学院を終えたのちも、成城大学の専任になってからもゾラに打ち込み、その成果を大学の紀要などに発表していた。やがてそれが出版社の目にとまることとなり、『若きジャーナリスト　エミール・ゾラ』(誠文堂新光社、1982)という形で結実し、やっと日の目を浴びるに至る。ジャーナリズムでも取り上げられ、かれにとってそれは人生最良の日々であったに違いない。

個人にまつわる話はそれまでとして、かれの発表した文章の全貌については筆者の知るところではないが、自然主義とゾラについては、かれが以前に反訳したピエール・マルチノの名著『フランスの自然主義』(朝日出版社、昭和43年)の「あとがき」や、当の処女作『若きジャーナリスト　ゾラ』の「はしがき」でまとまった考えを展開しているので、それに従って議論を進めて行くことにしよう。ついでながら、いうまでもなく、自然主義はリアリズムそのものではない。リアリズムを母体として、その延長線上にある文学現象であるが、ルーツは同じであり、それを通してリアリズムを考えることも可能である。その意味で、本論に入る前に、マルチノによって、自然主義をかんたんに一べつしておくことにする。

マルチノは、自著『フランスの自然主義』で自然主義という語の意味の検討からはじめている。それは、もとはといえば、一八七〇年以後の小説や芝居の傾向を示すために用いられた。当時は、フランスのあらゆる領域で実証主義が決定的な力を持ち、その影響で自然主義は写実主義を継承し、強固にし、誇張した。ついでマルチノは、このことばの発生、由来、そして変遷のあとを辿っ

ていて、その中で、「博物学者 naturaliste」という類語とのかかわりと、当時の時代思潮の影響下で、博物学者と、文学者の方法が頻繁に比較されるようになったことを指摘する。このような詩人や哲学者の努力、すなわち科学から直接に借りた知的作業法、これが徐々に自然主義と呼ばれるようになるのである。

この語が決定的に一般化するのは芸術家の世界――まず美術批評、ついで文芸批評――である。それは、時代精神の体現者として古い伝統と衝突しながら、しだいに社会的かつ政治的意味合いを帯び、カスタニャーリの主張に見るように、まさしく芸術上の実証主義精神、そしてデモクラシーの精神と結合した科学への情熱によって芸術を刷新しようとする意欲に発展し、人類の解放を目指すまでにいたる。やがて『ボヴァリー夫人』（1857）が出現し、それはレアリスムとナチュラリスムのバイブルとなる。『ボヴァリー夫人』は、十九世紀の最初の〈科学的小説〉の一つであり、このようにして科学的小説というレッテルが、自然主義のレッテルそのものとなった。科学的小説とは、1860 年から 1870 年にいたる 10 年間の、ゴンクール、ゾラ、テーヌの作品のことである。

さて、上記の、マルチノの反訳の「訳者あとがき」の中で、訳者の尾崎は、まず数年前（当時）にはじまったリバイバルの風潮に触れ、その流れの一つとして、この『フランスの自然主義』――すでに昭和初年と第二次大戦直後の二度にわたって辰野隆、本田喜代治によって訳出されている――を取り上げる理由を述べている。「すでに敗戦後二十年」とあり、それからでも四十五年を経過した今、ふり返ってみて、あらためて時のうつろいを感じずにはいられないが、それはともかくとして、それでは、なぜこの「時代おくれと見なされる自然主義に関する著作を今、わざわざ反訳するのか。「なるほど、日本では、自然主義といい、ゾラといい、いずれもあまり興味を持たれないのが現状である」。そして続けて訳者はつぎのようにいう。

> 自然主義といえば、あいかわらず生理学であり、遺伝であり、実験小説である。そして〈自然主義的〉という修飾語は、現実暴露的であること、性的露出症であること、平板であること、日常瑣事にこだわること、無思想であること、前時代的であか抜けしないこと、とにかくあらゆる悪い意味を付与されている。われわれの間では、自然主義という語はペジョラティフにしか用いられないのが長い間の習性である。

おそらく、それは田山花袋以来、自然主義小説が私小説に転化していった記憶があまりにも不愉快でいとわしいからであろう、として、明治から昭和にかけて、このエコールが日本で辿った経路をふり返ったあと、「このような文学的風土にあっては、自然主義が軽んじられるのは当然というほかはない」と結論づけている。

しかし、ナチュラリスム発祥の地、フランスでは、事情はまったくちがっているようだ。「リーヴル・ド・ポシュ」双書の売り上げだけ見ても、ゾラはサルトルを上廻り、フランスでは自然主義やゾラが決して過去の遺物ではなく、今なお日常的文学生活の中で大きな位置をしめているのである。「今日なお、ゾラと自然主義をぬきにしては文学を語ることができないといっても過言ではあるまい」。ついで、尾崎は昨秋（当時）来日したサルトルの講演に触れ、その中でサルト

ルが客観世界を対象とする作家としてゾラとラシーヌをあげていることに注意を喚起し、サルトルにとって、ゾラがいかに重要な作家であったかを指摘する。「とにかく、ゾラに反対であろうとなかろうと、現代文学を考える場合、自然主義を通過しなければならないのである」。

ところで、自然主義小説を考える場合、ゾラの死後半世紀以上（当時）を経た今日、自然主義にたいする考え方がかなり変っていることをまず認識しなくてはならない。「自然主義的であるというだけで、深い理由もなく、いわば惰性で、ある作品や作家を排除する精神からは、いかなるすぐれたものも生まれないだろう」。ともあれ、自然主義の全盛時代後、すでに四分の三世紀（当時）が経過しようとする今、冷静にこのエコールを見直す時である。自然主義にたいする冷静で、しかも斬新な見方を与える著作として、尾崎はアルベレスの『現代小説の歴史』（新庄・平岡共訳、新潮社、1965）をあげる。この批評家は自然主義小説を「きびしいあわれみの小説」と規定し、その代表者としてトルストイ、ゾラ、ハーディ、マルタン・デュガールをあげている。「今日、自然主義的作品というとき、科学的真実への要求はほとんど見られない」（リカット）が、アルベレスも自然主義から科学や社会学をほとんど切り捨てている。それでは、自然主義は、今日どんな意味を持つのであろうか？

自然主義が熱中した科学や社会学への執着を乗り越える時、それは人間にたいする情熱となり、人間をその意志や限界や運命の中で駆り立てる。原理的にはそういった法則を重視するが、その単純な仕組みの中に人間の生活を《説明する》のではなく、規定する力のからみ合いを見るのであり、そのとき、それぞれの人間の一生は、宿命にたち向かう《生きる意志》として発現する。…このようにアルベレスはさらに議論を展開するが、それは省くとして、かれはそこに発想の偉大さを見、その発想の偉大さが、より簡単に《レアリスム》と名付けうる、平板で、絵画的で、記録的で器用な単なる描写と、この種の小説を区別するのである、とする。アルベレスはこのように、きわめて現代的視点に立ち、ゾラの中のもっとも重要な要素にあたらしい照明を投げかけたのであった。現在の時点（当時）では、これ以外、自然主義の解釈はあり得ないであろうが、よく読めば、マルチノ――その分析と整理の非凡さは、これを越えるものはなく、この小著一冊でナチュラリスムは尽きるといってよいだろう――にその原型は見出だされるのであって、それが、あらためてリバイバルの一つとして訳出したゆえんである。

以上、尾崎の「訳者あとがき」をかいつまんで紹介したが、ついで『若きジャーナリスト　エミール・ゾラ』（1982）の著者による「はしがき」に移ることにしよう。こちらは7ページほどの短文だが、近年（当時）のゾラ研究の重要な成果としてゾラの書簡集の出版をあげ、その持つ重要性に触れている。また1977年には『居酒屋』の100周年を記念する会合がカナダで、また1979年にはフランスのリモージュ大学でゾラの会が開かれるなど、ゾラは外国では、今なお大きな関心を持って迎えられていることを指摘する一方、わが国での評判について、それがあいかわらず香ばしいものではないことを注意している。日本では、ゾラは小説好きやフランス文学者から敬遠され、排斥されるが、一般の読者はしかたがないとしても、フランス文学者が同じような態度を取ることはなげかわしいと同時に、許されないことであると尾崎は断ずる。なぜなら、

ゾラはフランスの文化と文学のなかで、ラシーヌとボルテールとまったく同じ程度に重要な地位を占めているからである。[…] かれらはそれぞれにフランス国民のなかに深く根ざした文学者である。よかれあしかれ時代の文化の担い手によって深く支えられ、フランス的土壌そのものから生まれた代表的文学者である。いいかえれば彼らはフランス精神そのものである。

日本におけるゾラの不人気は、要するにゾラに関する無知からであり、日本ではいまだに100年前のゾラの見方がそのまま通用し、100年前の論戦のなかで曲解と歪曲のもとにつくり上げられた古いゾラ観が今にいたるまで続いているのである。

以上の点に注意を喚起すると同時に、尾崎はゾラの作家以外の、ジャーナリストとしての側面の重要性を説いているが、それはともかくとして、以上がその「はしがき」のあらましである。そして、このようにして尾崎は、新しい自然主義像を打ち出したアルベレスを全面的に支持し、その研究と普及を目ざして、いつごろのことであったか、学会内に自然主義研究会を立ち上げるなど精力的な動きを見せた。そのうちに、いつか「日暮れて道遠し」といった口吻を洩らすようになり、これはすでに、先に述べたが、渡仏スタジェールの団長としてフランスに渡った時、現地での講義に際して配られたテキストが十九世紀のリアリズムであったか、自然主義のテキストであったか、いずれにしろ日本のスタジェールたちがそれに対して一様にイヤな顔をしたのを目のあたりにして、それがショックだったようである。

3

ところで、今、上記の尾崎の文章に目を通してみて、あらためてさまざまな思いが頭をよぎるが、とりわけ時代というものを感じずにはいられない。かれは1931年、当方はそれより2年おくれて生れ、共に幼年および少年時代を天皇制と軍国主義の支配下ですごし、太平洋戦争を経験したあと、敗戦後は一転してアメリカ主導の民主主義なるものを知らされる世代である。そして生活の立て直しと復興に追われる一方、独りよがりな国家経営が招いた惨敗のショックと反省から、日本の社会の遅れと後進性、そしてその近代化の必要が、戦勝国でもあった先進国をモデルとして声高に叫ばれる。最近、民俗学者の沖浦和光（84）が、当時をふり返って、思えば明治に続く「二度目の脱亜入欧」だったと語っているが、まさしく二度目の開国だった、といってよいだろう。十代から二十代にかけてこんな時代環境の中で成長し、われわれが聞かされたのはもっぱら日本の近代化と近代的自我の確立、それに――当時は米ソ対立の時代だった――資本主義の克服と社会主義ないしは共産主義の待望だけだったような気がしている。

こういった状況において育った人間が、好むと好まざるにかかわらず、大なり小なり西欧中心の近代主義者に仕立てられて行くのは当然すぎるほど当然であろう。その意味で、わが亡友はそういった近代主義者の一人であり、そういう者として生き、考え、そういう者として終ったという気がするのである。たとえば、先にあげた文章の中で、かれはゾラや自然主義の日本での不人気に言及し、とくに後の「はしがき」で、その不評は日本人の無知のせいであり、日本では100

年前の古い見方がそのまま横行していると断じている。たしかに、無知は恥ずべきであり、正さなくてはならないし、また100年前の見方にあぐらをかいていて進歩がないとすれば、それは決してほめた話ではない。これらの指摘は、フランス中心史観からすれば、100パーセント正しいのであろう。問題は、この亡友が、フランス文学の研究者としてフランス中心の見方に理解を示すのは理解できるとして、その先進文化の高みから、すなわち上から啓蒙するといった気味が感じられることである。

すでにわが書評（続）で紹介したことだが、批評家の佐伯彰一はその『比較文化論の系譜』（講座：比較文化第八巻『比較文化への展望』、研究社、1977）の中で近代日本文学を例にあげて日本の比較文化論を論じ、それがかかえる問題が多すぎるとし、そこに日本の比較文化論の基本にかかわる難題を見ている。急激な西欧文化への傾斜と共にわが国の近代が始まったのであるが、西欧化、近代化が進行するにつれて、「一方では、モデルとしての西欧、目標としての西欧近代がそのまま信じこまれたため、他方、そのために健全な比較文化の意識が眠りこけてしまったためであろう」、西欧的な価値観、文学史的な枠組みと理念を、ほとんど検証抜きで受け入れることになり、西欧型の時代区分、主義と運動の推移の図式を丸ごとうのみにするようになった。このようにして比較文化の意識、異質性の自覚が失われてゆく。そういった流れの中で、普遍主義（西欧近代のこと）と固有主義の間に引き裂かれた、最初の世代として佐伯は漱石、鴎外、藤村などをあげ、かれらをもってわが国の文化史、思想史において初めて比較文化の意識を身につけた世代、とみとめることができるのではないか、とこの批評家はいう。

このように普遍主義と固有主義と名づけるにしろ、外来思想と土着思想（加藤周一）と名づけるにしろ、それは日本のような後発国――しかも文化圏を異にする――の宿命のようなものという他はないが、いずれにしろわが尾崎教授は、すでに述べたようによくも悪しくも普遍主義もしくは外来思想の側に立つ、近代主義者であった。

4

さて、最後に、はじめに提起した問題、すなわち、日本にも当然リアリズムはある。しかし、それは西洋風リアリズムとは違うものだとすれば、それはどう違うのかという問題にもどるとして、それは、すでに述べたようにわが書評の「続」でそのアウトラインに触れておいたが、この機会にもう少し議論を深めることにする。

本来、こういった問題を扱うには、日本の歴史、社会および文化についての高度な知識のみならず、洞察力をも必要とするのであろう。いずれも評者の知識と能力を越える作業という他はない。それでも若干の感想とヒントを試みるぐらいは許されると考える。

わが最初の書評でも紹介し、またこの文章の冒頭でも触れたが、演出家の蜷川はイギリスで、現地の劇団を演出した経験から彼我のリアリズム演劇の違いを次のように語っている。

［俳優の技術は］水準は高い。それとリアリズム演劇という意味が日本とはまったく違う。本当にリアル

なんですよ。食べるシーンでは本当に食べる。首をしめるシーンでは本当に飛びかかっていく（傍点筆者）。

そして、これは文化の問題であるとして、日本は近代化の一つとしてリアリズム演劇をとり入れようとしたが、その様式だけを輸入したにすぎない、と断じている。同じ演劇人の浅利慶太もあるインターヴューで、日本人とリアリズムの関係に言及し、同様の感想を洩らしているのもすでに見たとおりである。これらの演劇人の感想を前にして、あらためてリアリズムとは何かということを考えずにはいられないが、いずれにしろ、蜷川がイギリスの演劇の現場から伝える様子からうかがえるのは、様式の一つというようなものでは断じてなく、かれらの生活そのもの、そしてそれの表現そのものを意味するということだろう。

さらに、評者がこの問題を考えるきっかけとなったものに、比較文学専攻の、日本文学を研究するイタリヤ女性へのインターヴューがあることはすでに書評の最初に述べたが、その中で彼女はつぎのように語っている。俳句では、よくホトトギスが出てくるが、

理屈っぽい西洋人は、そのホトトギスが飛んでいるのですか、それとも枝にとまっているのですか、と質問してくるのです。

ここで提出されていることは、何も直接リアリズムに関係することではないが、そこに通ずる基本的な物の見方、捉え方であるといえよう。いや、単なる物の見方というより、一つの大きな世界観を感じさせる指摘ではないだろうか。そしてその世界観とは、西洋文化の根本を支える絶対者の思想（高階秀爾）なのである。

いずれにしろ、本来のリアリズムは、このように西洋人の生活そのものから生れ、そしてその世界観を背景とするのである。日本人は、そのリアリズムを近代化の一つとして――演劇にかぎらず――「写実主義」と訳して取り入れようとしたが、しょせんその土壌を欠き、結局は単なる技法か、形式に終ったということなのであろう。

さて、その、ヨーロッパ産のリアリズムとは違う、日本人にも当然あるとされるリアリズムについて、それを明らかにするのは簡単なことではないが、いずれにしろ、リアリズムを現実の表面をなぞるだけの技法なぞではなく、一つの世界観を反映する基本的な物の捉え方、すなわち基本的な精神のあり方の問題と考える場合、アプローチのあり方も当然変ってくるだろう。その点で、高階秀爾に『ユマニスムと日本文化』と題する、示俊に富む文章（高階『日本近代の美意識』、青土社、1978 に所収）がある。高階は、そこで西欧のユマニスムを論じ、ついでわが国に目を転じて、「ユマニスム」または「ヒューマニズム」も本来、人間にかかわるものであるが、同じ人間といっても西欧での人間と、わが国での人間とでは、単にニュアンスにとどまらない、そのとらえ方や見方に大きな違いがあることを指摘する。「その差異をはっきりと認識しなくては、ユマニスムを理解することはできない。」

このように見てきて、評者の念頭に浮かぶのは和辻哲郎の、有名な著書『鎖国』の「序説」の冒頭で述べられた、悲痛な訴えとも感じられる文章である。この著作には「日本の悲劇」という

副題がついているが、著者によると、太平洋戦争のさなか、近世をテーマとして組織された研究会で行われた研究を基にして戦後発表されもののようである（最初の「序」の日付は昭和 25 年 2 月 1 日となっている)。その「序説」は、「太平洋戦争の敗北によって日本民族は実に情ない姿をさらけ出した」という文章ではじまっている。「有限な人間存在にあっては、どれほど優れたものにも欠点や弱所はある」として、今は日本民族の欠点について深刻な反省を試みることが、この欠点を克服するのに必要な作業であると和辻はいい、その欠点として科学的精神の欠如をあげる。合理的な思索を軽んじ、偏狭な狂信で動いた人間が日本民族を現状に陥し入れた。

> そういうことの起り得た背後には、直観的な事実のみに信頼を置き、推理力による把握を重んじないという民族の性向が控えている。推理力によって確実に認識せられ得ることに対してさえも、やって見なくては解らないと感ずるのがこの民族の癖である。

このような認識に立って、和辻はこの欠点の遠因を鎖国に求め、その究明に乗り出すのである。

このように、個人のみならず、集団や民族にあってもその性向は、危機的状況においてもっともあらわになると考えられるが、ついで、阪神大震災で精神科のボランティアとして活動したある精神病理学者（野田正彰）と、作家の小松左京との、震災をめぐる対談（「毎日新聞」、オピニオン　ワイド『小松左京の’95　大震災』、「こころのケア」下、1995・12・16）で、この精神科医は、災害と精神医学との関係について、そして日本の大学での精神医学の現状について語り、結論的につぎのように述べている。

> 人間の精神の発見は近代ヨーロッパです。アジアは精神だ、というのはうそなんです。ヨーロッパは物質と霊の問題を徹底的に考え抜く中で近代の精神を発見していったのです。対人関係のあり方や、価値観や、その価値観とのかっとうの問題などですね。日本では精神医学が脳の医学としてしか基本的に受け入れられていない。

「アジアは精神だ、などというのはウソだ」というのを聞くと、たちまち「相もかわらぬ西洋中心思想だ」とか「西洋かぶれもいいかげんにしろ！」といった反撥が返って来そうだが、果してそうだろうか。今年（2011 年）3 月、日本列島は大震災におそわれ、とくに東北地方は地震と津波で壊滅的打撃を受けた上に原発の被害にさらされて、まさしく一大国難の様相を呈している。報道と情報が列島を飛び交い、一方、意見や論評もあらゆるメディアで活発だが、その中から、われわれのテーマにかかわるものを一つ取り上げて考察してみよう。

4 月 1 日の「朝日新聞」の、「オピニオン」欄インターヴュー『3・11　科学技術は負けない』で元東大総長で三菱総研理事長、科学システム工学、地球環境工学を専門とする小宮山宏が「3・11」以後の科学と社会のあり方について発言していて、最後の方で、原発、原子力利用について徹底的に議論する必要を説いているが、その中で次のような指摘がある。

［…］この国はゼロからの議論、大人がする議論、具体的な根拠に基づく議論がなさすぎる。［…］

話のついでに出て来たような発言で、一般にはあまり注意を引かないかも知れないが、その意味するところは深いものがあると思われる。べつに整理された思想というのではなくても、その指摘から浮かび上って来るのは、この国における、いわば“精神の不在”というものではないだろうか。とくに、「ゼロからの議論」というのは、まさしくデカルトが近世の初頭で試みた作業であって、それが欠けているのを指摘している点で、小宮山の議論は、先の精神科医の野田の議論とぴったりと一致しているのだ。

むすび

もともと、リアリズムと、その日本語の訳語「写実主義」との間に意味のずれを感じ、リアリズムをそれだけ切り離して論ずるのではなく、もっと広い文脈で捉える必要を感じていたところ、吉田秀和の、「西欧起源のリアリズムにたいして、日本のリアリズムは違うものだ」という指摘に触発されて、その違いを追って現在にいたった。いわば、「ディスカバー・ジャパン」ならぬ、「ディスカバー・リアリズム」の旅に出たというわけである。

先に見たように、高階秀爾は西欧のユマニスムを論じている中で、西欧での人間と、わが国での人間との間の、その捉え方や見方にある大きな違い――単なるニュアンスにとどまらない――に言及していう。「その差異をはっきりと認識しなくては、ユマニスムを理解することはできない」。同様に、リアリズムについても、「その差異をはっきりと認識しなくては、リアリズムを理解することはできない」といえるだろう。わが試みが、その課題に成功したという確信は持てないが、少くともそれに多少の寄与ができたとすれば、望外の幸いとするところである。